

序 文

長崎大学公開講座叢書は、今回をもって10冊目を数えることとなりました。叢書発刊10周年という、一つの節目を迎えたわけであります。今回の主題は、「地域医療の最前線」であります。

1996年度は、薬害エイズ事件の真相究明が大きな課題でありました。厚生省からの資料提出、損害賠償訴訟の和解成立、そしてついに安部 英、元厚生省エイズ研究班班長の逮捕、厚生省の捜索へと展開をしました。1997年度は医療保険改革と介護保険法案、臓器移植法案等の成立がありました。

人間の健康と生命を司る医療は、いつの時代においても、またどの場所においても、我々にとって最も重要で関心のある問題であります。医療費、医療の情報公開、末期がん患者の痛みなどの緩和をする緩和治療、インフォームド・コンセント(治療行為の十分な説明にもとづく同意)、がん告知、ターミナルケア、尊厳死、安楽死、リハビリテーション、メンタルヘルス等々、医療をめぐる事柄は、尽きせぬものがあります。

最近では、感染症が一つの大きな課題です。WHO(世界保健機関)が発表した年次報告書「世界保健報告」によると、世界で感染症の犠牲になっている人間は、1日に約5万人、1年に1,700万人以上にのぼるとのことです。また、最近25年に、エイズやエボラ出血熱など、約30種類の、人と動物の新たな感染症が発見され、ワクチンなど有効な治療法がなく予防が不可能なことから、数億人の健康が今後危険にさらされると警告されています。

癒しの環境(healing environment)ということも、病苦になやむ患者にとっては関心があります。病院とは、病人が治療を受ける場所ではありますが、患者が自ら病気を克服しようとする「治りたい、よくなりたい」という気持ちを引き立てる空間であるとの見方が、つまり医療機関のアメニティ(快適性)への関心が高まっています。

医療は、保健や予防医学や福祉と切っても切れない関係を持っています。すなわち、病気になる前に、病気にならないようにすること、不幸にして病気になった後の社会生活への復帰、病者への支援体制の構築などです。医療とは、単一のものではなく、相互に関連する分野の複雑に相互作用するシステムであります。さらに、先端科学技術の医療への応用や、医の倫理の問題が入ってきます。

このような高度かつ複雑な医療ですが、結局は、人間が人間をたすける行為でありますから、医師やコ・メディカルの方々の一人一人の資質が基本であり、かつ公約数的な技術や制度に加えて地域社会の個性ないし事情というものが占める重みは決して小さくはありません。ここに地域医療ということの意義があります。本書は、長崎大学における地域医療についての現代的課題と実践についての共同研究をとりまとめたものであります。本書が、本学の地域医療への取組の現状をご理解いただける機会となるとともに、有益なご助言を賜る契機ともなれば、まことに幸いです。

終りにあたり、本書の企画にあたられた生涯学習教育研究センター運営委員会、ならびに執筆下さった方々へ深甚な敬意を表するとともに、刊行にご尽力をいただいた大蔵省印刷局へ深く感謝をいたします。

平成10年1月

長崎大学長 横山 哲夫